

バス乗車体験ツアー



行きの車中



犬山駅東口に到着



ツアー案内チラシ

4. 事業企画・実践

● 今回の取組のねらいを再確認 事業企画 / 「コミュニティバスを活用した買い物体験」

普段、バスに乗り慣れていない高齢者は、いざ、バスに乗ろうとしても乗り方が分からず足が遠のいてしまいます。今のうちに乗り方を覚えてもらうことが今回の取組の主目的であることをみんなで再確認しました。

その上で、事務局で作成した事業計画のたたき台をベースに、①取組の周知・募集、②バス停までの移動サポート、③バス停案内、④体験ツアーの運営管理など、詳細を固めていきました。

なお、この取組には、城東地区高齢者あんしん相談センターの協力を得て実施しました。

● 取組は極めてシンプル、多数の参加者 参加者募集・実践 (2/13、2/20の2日間)

取組は極めてシンプルなものです。日程を決めて参加者を募り、みんなでバスに乗り犬山駅前でお食事・買い物をして、再び今井まで戻ってくるという取組です。

2月13日と20日の2回開催することとし、バスのサイズから定員15名で募集したところ、両日ともほぼ定員一杯となりました。

参加者の年齢層は70歳代後半から80歳代の高齢者で、今回の取組のターゲットとした方々に参加いただきました。

5. 事業の評価 反省会

● 好評を得たバスの乗車体験

取組実施後に参加者から寄せられた声は、概ね好評で、また企画して欲しいというものでした。また、今は車に乗っているが、今後のために「バスにも乗らない」と考え始めていた方々が進んで参加されていたこともわかりました。

次は、バスの乗り換えを体験しつつ、花見に出かけようかという話も出ているほどです。

● 今回の取組を次につなげていくために！ 今後に向けた課題 (次年度以降の取組に向けて)

今回の取組は好評でしたが、今後に向けていくつかの課題も明らかとなりました。

- ①取組の企画を誰が担っていくか。世話人やリーダーが必要となります。
- ②バスを知る入口の取組としては成功でしたが、行きたいところに行けるよう、バスの乗り換え、路線を学ぶ必要があります。
- ③アンケートの中で、中高生の親世代(40歳代)が、子どもの送迎で大きな負担を強いられていることも明らかとなりました。こちらについても解決策の検討が必要です。



平成30年度 今井小学校区での取組 交通弱者対策を考える!!

今井小学校区コミュニティ推進協議会では、交通弱者に関する地域の実態を調査して、社会実験『バス乗車体験』に取り組みました。



はじめに

● 課題解決型まちづくり

市では、超高齢化、人口減少社会などの変化に対応するため、地域が主体的に課題解決に取り組む『課題解決型まちづくり』の普及を進めています。

多様な地域の人材が話し合っ、地域の実態を把握し課題を整理します。そして、その課題解決のためにどのような活動が必要かを考え行動する。規模は小さくても、自分たち自身でできることを行う、持続可能な地域コミュニティを増やしていきたいと考えています。

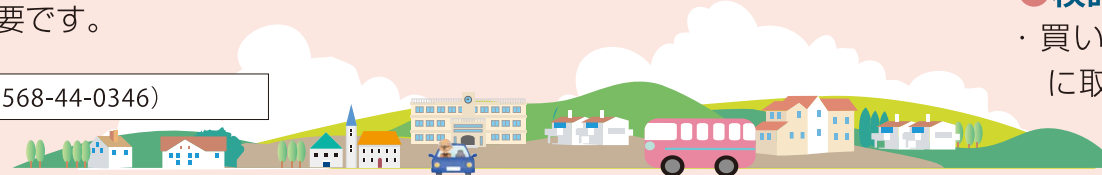
こうした取組の一環として、平成30年度には、今井小学校区コミュニティ推進協議会が、「交通弱者」の問題をテーマに、「地域の課題解決モデル事業」に取り組みました。本冊子ではその取組のあらましを紹介します。

● モデル地区の紹介 ～今井小学校区～

- ・今井小学校区は、入鹿池の北に注ぎ込む成沢川沿いにあり、周囲を里山に囲まれた自然豊かな農村部です。
- ・人口681人、世帯数210世帯、高齢化率37.4%(平成27年国勢調査による)で、少子高齢化が進んでいます。
- ・平成25年9月にコミュニティ推進協議会が発足し、桜の里づくり、子ども神輿、キャンドルナイトなどの多彩な活動を展開しています。

● 検討テーマ

- ・買い物や通院などの移動に苦勞する「交通弱者」の問題に取り組みました。



1. 地域の課題抽出

● 買い物難民(交通弱者)問題に挑戦 テーマ設定 / 「買い物難民(交通弱者)への支援」

今井地区では、高齢化の進展により、買い物や通院などの移動に苦勞する「交通弱者」の問題について、地域の課題になっていることが心配されていましたが、具体的な調査を行ったことはありませんでした。モデル事業を機会に実態を調べてみたいという会長の意向もあり話し合いを始めました。

● 何に困っているのかが分からない! 問題点、課題の洗い出しに向けた協議

一般論として「交通弱者」が問題に取り上げられますが、最初の協議の段階では、今井地区では、『困っている方の姿を見かけない。』、『何に困っているのか。』という意見が大半でした。実態として誰が何に困っているのか、調査をして現状を明らかにすることからはじめることとなりました。



2. 現状調査、分析

● 今井地区の人口構造 人口構造分析(男女別年齢別人口)

今井地区の人口は60歳代に大きなピークがあり、今後急速に高齢者が増えていくことがわかっています。

● 実態把握のためのヒアリング、アンケート

ヒアリング調査(民生委員、高齢者、支援団体等) 住民アンケート(中学生以上の全住民対象)

ヒアリング調査では、高齢者の事情をよく知る地区の民生委員さん、サロンに集まる高齢者、実際に車を使わなくなった高齢者などに話をうかがい移動の実態を調べました。

また、中学生以上の全住民を対象としたアンケートを実施し、実態把握を行いました。

● 実態調査で分かってきたこと 現状分析

～車を手放したくても手放せない高齢者～

① 買い物に関しては、自分自身または身内(ごく親しい親族)で対応できている。

・90歳近くになると日常のライフスタイルができあがっており、進んで外出することは希望されないようです。若い人に迷惑かけたくないという気持ちも強く働いています。

・現状では、同居または近隣在住の家族の支えがある方々がほとんどなので、移動に不自由されている状況が表立ってはいないようです。

・アンケートによると、「車を運転しない高齢者」は70歳代で11人、80歳代で53人、合計64人でした。

② 車がないとどこにもいけないので、不安を抱えながらも運転せざるを得ない。

・70・80歳代の高齢者は、運転免許を返納した方が良いと理解していても、生活できなくなることから返納できないのが現状です。

・30人の高齢者は、「なるべくなら運転したくない」と考えています。

③ これから高齢者は急増する。交通弱者問題は今よりは深刻化する可能性が高い。

・高齢者ドライバーが増加することによる、交通安全上の不安は拡大します。

・今後、独身の高齢者が増えることが予想されます。また、頼みごとのできる身内が近くにいない高齢者も増えます。そうすると交通弱者問題は深刻化する可能性があります。

④ コミュニティバスの利用度は低い(ダイヤ改正前)

・コミュニティバスを普段から利用している方はアンケート結果上4人とどまっています。バス停までの距離があるなどの理由で利用されていないこともわかってきました。

課題解決型まちづくり実践のサイクル

1. 地域の課題抽出

- テーマ設定：『買い物難民(交通弱者)への支援』
- 問題点、課題の洗い出しに向けた協議

2. 現状調査、分析

- 人口構造分析(男女別年齢別人口)
- ヒアリング調査(民生委員、高齢者、支援団体等)
- 住民アンケート(中学生以上の全住民対象)
- 現状分析

3. 解決策の検討

- 課題解決のためのアイデア出し
- 解決策のニーズ確認のためのヒアリング

4. 事業企画・実践

- 事業企画：『コミュニティバスを活用した買い物体験』
- 参加者募集・実践(2/13、2/20の2日間)

5. 事業の評価

- 反省会
- 今後に向けた課題(次年度以降の取組に向けて)

3. 解決策の検討

● 地域コミュニティとして何ができるか 課題解決のためのアイデア出し

現状調査から、年代別の基本的考え方を下記のように整理した上で、自動車を運転できなくなったときの備えとして、70・80歳代(まだ運転している方)を対象とした取組を考えることとしました。

アンケートで、「一人では外出できない」または「なるべくなら自分で運転したくない」と回答した方が利用したいサービスとしては、

① 移動販売・移動スーパー(29.2%)

② お店までの送迎サービス(29.2%)

この2つが上位でした。

この点を鑑み、地域コミュニティとして何ができるかについて話し合い、次の2つの案に絞り込みました。

【案1】 コミュニティバスを利用した買い物体験

(将来に備え、バスの乗り方をマスターする。)

【案2】 宅配による買い物講座

(将来に備え、ネット通販をマスターする。)



90歳代	・生活のサイクルができあがっている。新たなサービスに対する関心は低い。
80歳代 70歳代	・自動車が運転できなくなることを不安に思っている方が多い(交通弱者予備軍)。 ・時間はあるので将来に備える。
60歳代	・人口構成上一番多い世代。 ・身近なところに頼る身内がない高齢者が増える(交通弱者問題深刻化の恐れ)

● 本当に需要はあるのか 解決策のニーズ確認のためのヒアリング

上述の2案について、今井地区で行われている交流サロン参加者にヒアリングを行いました。サロン参加者30人のうち、コミュニティバスを使ってみんなで買い物に出かける取組について、「参加したい」という方が15名を数え、思いの外、需要があることがわかりました。

こうした経緯も踏まえ、最終的には、今のコミュニティバスの利用度を高めていくことについても視野に置きながら、【案1】で社会実験に取り組むこととしました。